

# 磁器（染付）を利用した授業の工夫

新栄高校 岡田 健

## 一 はじめに

新学習指導要領・世界史A（一）諸地域世界と交流圏で、モンゴルによるユーラシアの一体化を実感させる教材として、染付が教科書にも取り上げられるようになった。そこで、染付についていくつかの基礎事項をまとめて、教材化の手がかりとしたい。

## 二 基本事項の確認

### 土器

数百度の低温で焼成され、釉薬は用いない。透水性に富み、脆い。

### 陶器（つちもの）

一二〇〇度の高温で焼きしめるため、ガラス化がすすみ高い硬度を持つ。釉薬をかけることによって透水性をなくすことが出来る。但し、胎土が厚く透光性はない。また磁器に比べて脆く、敲くと鈍い音がする。より硬い陶器を求めて、さらに高温で焼くと粘土が熔け崩れる。釉薬をかけない（自然釉はある）ものを炆器（須恵器や信楽・備前・常滑など）という。

### 磁器（いしもの）

磁土・磁石・陶石などと呼ばれる、珪酸を多く含んだ原料を一二〇〇度以上の高温で焼く。胎土は白く完全にガラス化し、透水性はなく、薄く透光性を持ち敲くと澄んだ音がする。

## 三 中国における磁器生産の始まり

一般には、六朝からとされる。が、「殷時代、人工的に釉薬をかけることを始めた、高温焼成（おそらく一二〇〇度か）の灰色器を『プロト・タイプ・オブ・ポルセレン』として、磁器の仲間に入れるのがよい。」（三杉隆敏『やきもの文化史』）との説もある。

また、磁州窯（河北）・汝窯（河南）・耀州窯（陝西）なども全てが白く焼けた胎土ではなく、これらの窯の青磁も割れ口は灰色の半磁胎である。

さらに、佐藤雅彦『やきもの入門』による分類は次のようになっている。宋代に焼かれた青白磁（影青を世界初の磁器としている）。

陶器・古瀬戸、瀬戸黒、黄瀬戸、志野、織部、唐津、萩、薩摩、高取、越州窯青磁、鈞窯、磁州窯、天目、龍泉窯青磁、高麗青磁

麗青磁

磁器・伊万里、九谷、定窯白磁、景德鎮青白磁、白磁、青花

（染付）、色絵、：

## 四 染付（青花）

白地に青（酸化コバルト）で絵付けをする技法は、中国で開発されたのではなく、九〜一〇世紀にメソポタミア、イラン中東部で、陶器へ酸化コバルトで絵付けをすることが始まっていた。また、一四世紀の中国では酸化コバルトは発見されていず、専らペルシアからの輸入に頼っていた（回青）。

このように染付は、必ずしも中国で自然に生まれ、発達する条件を備えていなかった。しかし、ある事情で元代の中国で量産が始まった染付磁器（紀年のある染付は、至正一一（一三五二）年のものが最古）は、中国を代表する焼物として、現在も生産されている。

染付が中国で発達した背景について、研究者は次のように説明している。

「なによりも、磁器になにかを描くという嗜好や趣味が乏しかったこと：それが根本の理由かもしれない。いいかえれば、おおむねはつるりとした単色で構成されるシンプルな磁器の端整さにこそ、より強く宋代中国の人々は心ひかれ、その静かな佇まいをひたすら愛した。つまりは、絵付という需要がなかったのである。それに、そもそも、絵付に不可欠な良質のコバルト顔料そのものも、中国にはなかった。もっと正確に言えば、あえて捜そうとすれば、あるにはあったはずなのだが、必要な需要がなかったので商品化されていなかった、といったほうがいいのかもしれない。」(文献①)

「一四世紀初期にたくさんの青磁が回教圏に輸出され、次に染付が青磁に取って替わって輸出品の中心となる。ところが、元末期、染付が少なくなり青磁が再びメインとなる。ちょうど青磁と染付の生産および輸用量がシーソー・ゲームの如く揺れ動く時期がある。：一三世紀末より、青磁を主に回教系商人は商いをしてきたが、マーケットにほとんどゆきわたってしまい、新しい商品が必要となった。そこで考え出したのが、彼らが古くより作っていた染付陶器の技法、すなわちコバルトを顔料として筆書きで文様を描く、それを中国の景德鎮に注文すれば硬い染付磁器が焼ける。その顔料であるコバルトは自分たちの質の良い物を提供しよう、そう考えたのではなからうか。しかし、急に景德鎮に注文してもすぐには応じ切れない。では、今まで中近東むけの青磁の皿や壺を大量に焼いていた龍泉窯の陶工を景德鎮に移動させては、と話が中国人と回教徒の商人たちの間でまとまったのだろう。：

ところが、至正一一年(一三五二)、元朝を討つべく紅巾の乱が江西・安徽省でおこり朱元璋もこの軍に加わる。景德鎮はその革命さわぎに巻き込まれ生産は止まった。：元朝の終わる年一三六八年を待つて終わったのではなく、一三五一年が一応元染付の終わりである。そうすると回教徒商人は全く売れる物がなくなった。そこで戦乱の影響が少ない浙江省にあり、しかも川一本で海に出られる龍泉窯に青磁の中近東むけの大皿や水注しの注文を再び出すようになった。」(文献②)

## 五、おわりに

陶磁器の歴史は、時々政治状況を映す鏡である。今回は、紙幅の関係もあり、染付に関するごく基本的なことを記すに止めたが、景德鎮、伊万里から明末清初の東アジア海域世界の動きを見たり、マイセンと日中の磁器を結びつけたり、陶磁器の教材化にはいくつものヴァリエーションが考えられる。いずれ機会を改めて報告したいと考えている。

### 〈参考文献〉

- |                      |        |      |
|----------------------|--------|------|
| 三杉隆敏② 『やきもの文化史』      | 岩波新書   | 一九八九 |
| 〃 『世界・染付の旅』          | 新潮社    | 一九九八 |
| 中島誠之助 『古伊万里染付入門』     | 平凡社    | 一九九二 |
| 〃 『中国古陶磁入門』          | 平凡社    | 一九九六 |
| 佐藤雅彦 『やきもの入門』        | 平凡社    | 一九八三 |
| 坂井 隆 『伊万里』からアジアが見える』 | 講談社    | 一九九八 |
| 坂井隆大橋康二 『アジアの海と伊万里』  | 新人物往来社 | 一九九四 |
| 杉山正明北川誠一① 『大モンゴルの時代』 | 中央公論社  | 一九九七 |